

J.S.MillのUtilitarianismと現代日本の道德教育

著者	鈴木 孝
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	33
ページ	81-88
発行年	1993
出版者	東京家政大学
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00008868/

J.S.MillのUtilitarianismと現代日本の道德教育

鈴木 孝

(平成4年10月1日受理)

J. S. Mill's Utilitarianism and Modern Moral Education in Japan

Takashi SUZUKI

(Received October 1, 1992)

はじめに

Utilityの哲学はBentham、Mill、Sidgwickなどによって主唱されはしても、哲学の主流をつくり……といえない面があろう。イギリスにおいてもLocke、Berkeley、Humeに比するものとしてのMillの存在は異論のあるところかも知れない。その説くところがあまりに現実的、功利的、快楽的で皮相すぎるといのが一般通念となっているのは事実であろう。もとよりここで哲学論を展開してその可否を問うものではない。ただ、繁栄を求めてやまない日本の現代の潮流のなかにあつて、ヴィクトリア朝のMillの所説を考察することは日本の道德教育への考察になんらかの示唆を与えることを期して本論を稿するものである。

(I)

「人間とはUtilityの原理をむねとするとされている。どのようなとき、人はある行動や規制を認めるのかはそれが社会の幸福を増大するか、あるいは、減少させるかの割合によるのである。つまり、功利の法則、命令に合致するか否かできまるのだ。」⁽¹⁾ これはBenthamの言葉であり、以後の功利主義もこの立場を原則とするものである。すなわち、人の行動の正しさは人間の幸福の増大、不幸の減少にどれほど役立つかによって判断されるものと説く。それ故に、道德としては「最大多数の最大幸福」という命題に代表される現実的幸福論が意図されることになる。だから、現代日本の繁栄する社会の求めるものと同じような意図性が、当時のイギリス功利主義理念に働いているといつてよからう。

教職教養科 教育哲学研究室

Bentham (1748~1832) によればUtilityとはあるものによってなされた結果が、利益、優位、快楽、善、幸福にむかう場合であり、関係する社会の不幸、苦しみ、悪を抑へるものであり、社会と個人の幸福につながるものとされるのである⁽²⁾。このような幸福への考えかたがイギリス功利主義のUtilityの概念であるが、日本人が功利というときの語感とは多少異なっているのではないか、われわれが功利というとき打算的、私利私欲的印象を強めたものとなるが、イギリスのUtilitarianismでは社会の幸福につながるような個人の幸福が前提となっている面がある。

さて、J.S.Mill (1806~1873) はBenthamのあとをうけつぐべく、そして、ヴィクトリア時代の栄光のなかで、その時代精神を棹さすべく活躍した人であった。一般には、S.Millは a) BenthamのUtilitarianismを更に発展させた人、 b) 多面で折衷的eclecticな人、 c) 愛他的理念を無視しえない理想家肌の現実主義者といえるようである。

S.Millの所説をみてみよう。彼はいう、道德の基本としての信念、実利性Utilityの概念、最大多数の原理などはいづれも、幸福を増進させようとする度合に応じて正しいとされるのであって、その逆の場合は悪なのだ。すなわち、幸福論の客観性、普遍性は充分検討されるべきであるが、どう考えてみても、先験的なものかによって道德の根拠性を求めることはS.Millには不可能な不自然さとなる。そうである故にこそ、「苦痛を伴わない快楽の追求を事実として承認せざるを得ないのである。しかし、快楽そのものは、Millにとっては多次、多面なものとされることになる。なぜなら、人は豚のもつ快楽と同質の快楽しかもちえないのであっては矛盾に

落ちることになるから、快楽といっても動物よりすぐれた能力（快楽）をもっている人間が高次の快楽を認知した場合、それを満たさないかぎり満足はないことになる。つまり、肉体的快楽と精神的快楽があって人はこの振幅のなかで生きることになる。

Utilitarianは身体的快楽よりも精神的快楽をより優位なるものとするというのがMillの主張であり、それは理論を超えた事実として、むしろ、定立されるのである。「ある種の快楽は他より望ましく、より高次の価値をもつ」という。Millの論述をみてみよう。「快楽における質の差とはなにか、他よりさらに価値を高めているものはなにか、と問われるならば、快楽としてのみ考えるのならそれは、量的にすぐれているとしかいいようがない。二つの快楽があって、それを経験した殆んどすべての人がその一方に決定的に好みを示すのならば、道徳の理論とはべつに、それがより好ましく快楽であるということになる。もし、他方の本質的快楽が量的に優勢であっても、前者をあきらめないのなら、われわれは好まれたる前者に質としての優越性を与えるのは当然のことであり、他方（後者）が量的に優性であっても重要とはいえないことになる。」⁽³⁾

「さて、事実をよく知り、事実を理解する能力があり、かつ、楽しむことのできるものはより高い能力を行使するのを好むものである。動物の快楽を完全に理解せんとしてより低い動物に変えられてよしとするものは、まず、いないのであろう。知性ある人は無知の人になろうとはしまい、かりに、愚かもの、まぬけ、無頼の徒は他の人々よりもその運命により満足しているものであるといっても、人間の心情、良心を備えた人々が自分中心で卑やしいものselfish and baseになりたいと思うことはあるまい。無知の人にも教養する人にも共通している欲望を満足せんがためといっても、教養ある人の優れた欲望のすべてをあきらめさせてしまうこともない。もし、そういうことがありうるとするなら、その不幸がひどすぎて、そこから逃れんがために、その非は承知のうえ、自分たちの運命を変えてしまおうとするのだ。高い能力のあるものは自分をより幸福にしようとして劣った人々よりもより多くの苦悩に耐え、幸福に近ずきやすいものである。人はいろいろのものにむかう傾向があるにもかかわらず、より低い存在者と思うものにとどまりえないものである。われわれは好ましくないこと（苦悩）を好んで耐えしのぶことはどう説明したらよいのだろうか。それが人類がも

ちうる最も誇らしいものであろうとなかろうと、われわれはそれを誇りと名づけよう。誇りとは自由と自己の独立を愛することと結びつくものであり、それら自由と個人の独立を重んずるとは、かのストア派のプライドを教示する最も効果的な方法であった。権力への愛着、心の高まりを愛することに比して、自由と個人の独立を愛することは、実際、心に深く入りこんで大いに役立つものなのである。これに対する最も適切な名称は語感としては、品位dignityである。これはあらゆる人類がなんらかの形でもっているものであり、それははっきりした形をとらないがより高い能力と呼応したものである。つまり、それは幸福の本質的要因なのである。幸福をそなえた人とは幸福感が強く、相あらずともなく、瞬時はおろか、つねにそれを愛しもとめる人である。このような幸福をもとめる優れた人は幸福の実感を犠牲にせるもの、つまり、優れた人と劣った人が同じ環境にあるとすると前者は幸福感がとほしいとするのは、幸福と満足を全く混同せるものなのだ。幸福を享受する容量がひくければより充分、満足感を味わうことが可能となる。また、幸福への資質高きものは、世の常のしめす如く、自分の追い求める幸福はつねに不完全なものと思うであろう。いやしくも、それが耐えうるものであるなら、人は己れの不完全さに耐えることを学びとることができるものなのだ。己れが不完全だからといってもその不完全をいささかも意識しないでいられる人、すなわち、善きものについて感与する心を持たぬ人を羨むこともないのだ。満足せる豚よりは不満足なソクラテスのほうがよいということである。つまり、満足せる豚よりは、不満をもつ人類のほうがよいのである。もしも、愚かもの、豚が賢きものと違った意見をもつのならそれは問題の一面のみをみているからである。比べて、賢きものは事物の両面を識れるものなのである。」⁽⁴⁾

以上は格調あるS.MillのUtilitarianismの一節である。その品性を求める品格の琴線によれることを願って訳文として記した次第である。彼は功利の哲学者とされ、その評価は通俗化の功利を受けつぎ、功利をつき破らんとするほど理念に燃えたるが故に自己矛盾に落ちざるを得ない人ともいわれ評されるのが通念である。

逆に、現実論のもつ事実としての客観性を最も妥当なるものとするなら、その現実のなかの幸福こそが至上の客観性をもつものであり、しかも、自分の真実のなかに詩と現実への両面の覚醒する心情を意識したとき、これ

にまさるものはないことになる。われわれ自身、教師として次代のものへの教育は、「世の繁栄を求め、自己の栄達を求め、自分も他人も価値内容をより高めねばならない」と要請せざるを得ないのだから、それはS.MillのUtility概念の延長線にあるといてよいことになる。

そこで、もうしばらく彼の説くところをたどってみよう。人はしばらく2つの快樂のうちでより近いほうの快樂をまず、とりあげがちである。人は健康を害してまでも感覺をして満足させるではないか。ここで、S.Millはいう、人は必らずしもより低いほうの快樂を好み、満足しているのみではないと、一方の快を排除してしまうまえに、両方の快の内容を充分考察しているという。「気高い、ノーブルな感情を求める資質は、本性上、大そう柔和な植物のようなもので、敵意に対して弱いどころか自分の支えの支柱を失ってしまったら存在しえないというほどのものだ」という。それほどノーブルな感情は脆弱であることも指摘される。これは若ものがこの気高さの保持に専心しないのなら、それは、たちどころに消失してしまうものであり、青年たちの投げこまれる社会ではこのようなノーブルなる感情などなじみ薄きものだ。

人間はより低い感覺になじみがちなものであって、知的興味がなければ高貴なる気概など育たないのだという。そうであるなら、これはS.Millの教育哲学にもつながるものであって、①人間性とは現実としてのUtilityから出発するものである。つまり、実利を求める社会生活を無視することは許されないことである。②しかし、同時に、現実性はずねに高い理想とか理念、目標、ノーブルな気質によって支えられねばならない。この2面としての現実把握は、つまり、われわれ日本の現代の道德教育の次元を構成する2大要因であることも事実である。

前にも指摘したように、S.Millの快樂説と幸福説はより高い人格、高い価値の追求がみられて、はじめて、意味を持ちうるUtilitarianismであった。したがって品正ある人格の開發こそが社会の繁栄と幸福への前提になるわけである。これは、哲学というより、むしろ、現実主義としての社会繁栄論とみるのが至当であろう。事実、多くの人が、S.Millの理論的希薄性を指摘する。たとえば、Sorleyのイギリス哲学史をみると、S.Millは倫理についての普遍的考察と自分自身の心理ともいえる主観的個人的自己分析（快樂説）の結合に失敗したと。⁽⁶⁾

また、John Skorupskiによれば次の矛盾点が指摘される。①あらゆる人間の最終（究極）目標は幸福という概念に含まれている。a.幸福は究極の目的である。b.あらゆるその他の目的は幸福への手段、および、幸福を支えるものとして存在する。ここで、bの命題は微妙に深遠に説明されるのだが、著しく説得力の弱いものとなってしまっている。すなわち、幸福を集約して究極目標にむかう方法が短絡的である。だから、Sidgwickによって、あらためて、Utilitarianismの基礎的分析が行なわれるのである。②S.Millは正義規範とUtilityの全体が調和していくものと説くが、その媒概念が「幸福こそ唯一の目的」という命題のみでは全く証明されえない、などである。⁽⁶⁾

逆にいえばS.Millの所説は、それほど、哲学の学問性、普遍性、科学性を離脱した現実論、それは多面な現実、不連続の現実をそのまま受け入れた人とみるべきなのではないか。本論では、彼が私たちの道德教育の考察になんらかの手がかりを与えてくれればよいのであるから、現実主義者Millこそ尊重すべきということになる。なお、Utilityそのものは後継者Sidgwickの考察によって、さらに、適切な解釈が可能となることが期されるが、本論の目的ではない。その検討は別の機会にゆだねたい。

もうしばらく彼の説く「快樂」をたどってみよう。「公的にも私的にも愛情をもたない人の人生は短縮されたものであって、利己的なものは一切、その死によって終らねばならないとき消滅するのである。他方、自分のうしろに愛の対象をのこしていくもの、とくに、仲間としての感情を全人類にむかった視野で高められた人たちは、死の床においても若もの健康な心におとらず、人生への生氣ある関心を残すものである。利己心について人生を不満足にさせるものは、精神の開發 mental cultivation を怠った場合である。哲学者の心ではなく、教養ある心とは知識のもとになるもの、つまり、心が開かれている心である。心は、しかるべく、無理もなく、その能力が発揮できるように教育されるなら己れのまわりのすべてのものに、つきることのない興味をいだくものである。つまり、自然界の事物、芸術的能力、詩的想像力、歴史的出来事、過去や現在の人間の在りかた、また、未来への見通おしなどについてである。しかし、すべてこれらに無関心になることも可能である。まして、その千分の一すらも究めることもなく、はじめから、これらの事物に道徳的な人間的な関心などなく、己れの好

奇心の満足にのみ自分の対象をえらんでいる人もいるのである。⁽⁷⁾

このように、彼の好む精神の高さは、高められたUtilityの精神ではじめて可能とされるほかに、世俗的満足感では律しきれぬ次元ではない。「ユーティリタリアンの道徳によれば人類には、自分たちの最もよきものを他の人々のために犠牲にするという能力が認められる。…略…ナザレのイエスの黄金律のなかに、われわれはUtilityの倫理の完全な精神をみるのである。」⁽⁸⁾ この黄金律とは「なにごとにも自分にして欲しいよう人々にもその通りにせよ」であって、それがそのまま、S.Millの功利主義の道徳だという。Utilityの道徳では①法律や社会の調整によって、できるだけ、個人の幸福と社会全体の幸福がぐいちがわないようにする、②人間の品性に大いに影響をもつ教育や世論は、個人の幸せと社会全体の善としての方向をしっかりと結合しなければならない、以上の2点が2大要因として、その社会に備わったものでなければならない。もともと、Benthum的な快樂論者の自然科学的思想法を社会規範のパラダイムとすることに満足せず、S.Millは、文人、詩人からも強力な影響をうけていたことも見落とすことのできない事実である。詩人Coleridge、Wordsworth、Shelly、Novalisなどの読書は若いS.Millの心情に、科学や理性などと対立したなにかを感得せしめたであろう。Millは、己れの精神の破局時に、これの知識や経験を変様させるものは単なる合理や分析的経験のまったく外側にあるもの、つまり、心情的なるものであることを知ったのである。⁽⁹⁾

もともと、S.MillはBenthumとColeridgeに最も影響を受けたといわれる。彼の若い頃の著作Benthum論をみよう。⁽¹⁰⁾ それには、最近亡くなった2人の人がいる。彼らの影響はその時代のイギリスの思想家に重大なアイデアを投げかけたのみならず、思想の様式と検証に革命をもたらしたのである。この2人の人は性格上からも、環境からも、世間やビジネスからも隠遁し、2人は一応認められてはいたが、それも、2人に軽蔑にちかい感情をもって人によってである。この2人は人類に与えられた課題を更新すべく生まれた。そもそも、哲学は表面的には実務からも、人々の興味からも、まったく遠い存在のように思えるが、実際は、人々に最も影響を与え、あらゆる他の影響をおさえてしまうのである。そのことをこの2人の人が示した。その人の名はBenth-

umとColeridgeである。以上は有名な一節であるが、そこにあるように、この2名のMillへの影響は強力な終生かわらなかつたという。とくに、後者、ColeridgeやWordsworthの影響はMillの心情面に強く働かせかけたようである。

そこで、S.Millの道徳判断つまり道徳心、上記の詩人たちの豊穡なロマンティズムと共通の心情の面、それを、われわれは認めねばなるまい。つまり、道徳、高次なる快樂の根拠は、……したいという心情、傾向性、われわれ自身のうちの感情のなせるものとしか彼はいわない。

「この感情とは利害感にほだされず、それ自身、純粋な義務観念と結びついて、なにか特別の形式をもたず、その場その場の附帯的環境で生じるものであり、それは良心の善悪をみきわめる本質となっているものである。しかし、実際の人生の複雑な現実のなかでは事実そのものは附随する殻につつまれている。それは、同情や愛から生じ、さらには、恐怖から、すべての宗教感から、子供時代の回想から、過去の人生のすべてから、自負心や他人への尊敬から、時には、自己の卑下の心から生じているものなのだ。この、極端に複雑なものが一般に神秘的性格といわれるものの源泉になっていると思える。われわれは沢山の事例をあげることができるのだが、上記のように複雑な人間の精神の癖によれば、以上の精神は自分で道徳的義務観念などを生みだし、ただ神秘的法則などを仮想して、われわれの現在の体験のなかで己れを刺激するために見出されるもの以外には、どんなものにもその観念は由来しないと人々を思いこませしてしまうのである。このような観念の結合力は感情複合体に存するものである。われわれは、正義の規準を冒瀆するものをしらべるべく開明が進められねばならない。にもかかわらず、われわれがみずから、その規準を犯しているのなら悔恨の念をもって、それらの心情をとり扱わねばならないのだ。われわれが、意識の本能、起源についてどのような理論を持とうとも、以上のべたことは、根本的に意識を構成しているものなのである」⁽¹¹⁾

以上のように、S.Millは徹底的に感情を基体とする心の開明をおこなっている。われわれの心の主観的感情 subjective feelingが道徳への究極的 sanction だというのだ。この場合、感情 feeling は上記のごとく、現実にとって分析され、あくまで、現実の生活実感をそこなうことなく道徳分析がおこなわれていることは Utilitari-

an millをして躍如たらしめる思考の経緯を、そこにみることができよう。なお、道德の規準であり、道德を道德たらしめているsanctionは個人の感情、意図、目標をつくりあげ、同時にそれは、社会全体の善意志をも構成するものというのである。個人の自分本位の利己心がそのまま他と一致することは考えられない。自分の利己の感情は教育によって止場され高次のUtilityの理念、つまり、他人の幸福を自分の利己より優先させることになり得るというのである。そのかぎり、個人と社会の調和は可能となる。

このようなS.Millの思考は楽観に過ぎると評されるのであるが、あくまで、道德教育論として、現代日本の繁栄する社会への考察の一助として、S.Millのヴィクトリア朝の社会理念としての彼のUtilityの理論は大いに示唆するものをもつと指摘したいのである。史家Trevelyanによればこうある。「あらゆる階層で、社会の慣習や宗教的信念についてのフリーな理論が初期ヴィクトリア期の固定した信条に代って登場してくる。J.S.Millは自由論のなかで、因習的な意見をただ受けている態度を改めて、それに立ちむかうことを教えている。10年もするとかかる態度はあたりまえのものとなってしまった」と。⁽¹²⁾ この時代は自由で遠慮なしの時代で、代表的人物といえば貴族でも商人でもない。S.Mill, Darwin, Huxley, Matthew Arnold, George Eliot……であってDu Mauriesは好んで彼らの家庭生活をPunch紙に載せて楽しんでたという。自由主義、ビョクラシー、集産主義collectivismは大きな潮流となって、うちに沢山の入江や小湾をつくっていた。とくに、Darwinismの影響は大きかった。

1871年には宗教的信条にかかわりなく、すべてのものにOxfordやCambridgeが開放された。1869には初等教育が国民全体に用意された。1871～5の立法で労働組合はその成長によって、しかるべき権利をみとめられた。S.MillのSubjection of Women (1869)にそった形で女性の解放が進む。女性のcollegeや女性の中学が出現してくる。土地に執着していた農業労働者よりは賃金の高い都市型労働者が主役としての社会構成要因となる。鉄道や汽船の時代は目まぐるしく社会をスピード化させる。都市の整備が著しい。ヴィクトリア期の後半には都市衛生、照明、都市移動、公共図書館、入浴場……などが少しずつ改革されてくる。⁽¹³⁾

ここでは、とくにUtilitarianismの教育との結びつ

き過程を考察してみねばならない。

ヴィクトリア期の学校、とくに、パブリックスクールでは新旧の対立がみられる。2つの社会階層の代表としての旧来のlanded gentryとブルジョアジーに代表される新興階級の対立である。後者は、法律家、医者、役人、ジャーナリスト、学者……を含む。ちなみに、1818に土木技師、1834に建築家、1841に薬剤士、1848に保険統計家など、つぎつぎに独立した職業となったという。この人たちとともに工業資本主義が発展し当時のパブリックスクールの自由教育のカリキュラムには新しく世俗的の学科として職業教育が登場してくる。しかし、この教育そのものが、当時、問題をなげかけたのも過渡期の時代感覚のなせるわざであろう。当時、パブリックスクールでは法律や医学のような職業訓練に対しては功利をむさぼるもののstigma (汚名)が印象づけられていた。当時の著名な一校長は述べるが、有名パブリックスクールのカリキュラムを必要以上に職業教育に向かわせようすることは絶対に不可能であると。つまり、精神的肉体的基礎教育(リベラルアーツ)を無視してまでの職業訓練はありえないというのである。当時の学校カリキュラムの積極的側面はギリシア・ローマの古典の高揚、否定的側面は科学のもつ非宗教的恐怖感覚であった。そういう風潮のなかで、校長たちは、大かれ少なかれ、古典による文明や精神の基礎教育を賛えることで、その古典カリキュラムの防禦につとめたのである。たとえば、当時の大政治家Gladstoneに劣らぬほど評判の高かったR.S. Honneyはのべる「思うに、純粹科学、自然科学、現代語、現代史などと、古来からの古典語の学習は一つの原則にもとづいていなければならないということである。つまり、科学などが古典語と平列的、対等であることは許されない。それら(科学等の)真の立場は補助的ancillaryなものである。断固として、それらは補助としての制限されたものである。」⁽¹⁴⁾ このように19世紀とは、いまだ科学前夜の時代と、経験科学的職業がイギリスジェントルマンの好ましき職業となったのは20世紀になってからであったとWienerはいう。

このような社会の風潮のなかでのS.Millの態度はどうであったのか。第一にMillはUtilitarianismの擁護者であり、推進者であった。第二に彼は内実としての精神の高まりをより価値のあるものとみなし、その実現のための倫理をとらえた理想主義者であった。この両面は、当時の社会の要請に答えるものとして現実的思想家の当

然の歸結であったのであろう。S.MillのInaugral Adress (大学就任演説)をみると「はじめに、まず、今日みられる高等教育についての論争、すなわち、教育改革者と保守的な人々との間にみられる差異について考えてみましょう。それは、古典語と近代科学とその教養というやっかいな問題であります。一般教育は古典を旨とすべきか—この場合、私はより広い、文学といてよい意味内容を考えていますが—、それとも科学教育なのかということ。そのどちらかという問題は、思うに、画家の素描か採色かというのと等しき論議なのではないだろうか。—略—しかしなぜ両方ではいけないのだろうか。一体、文学と科学の両方とも含まないような教育はすぐれているといえるものだろうか。一方を欠くようでは貧しい、ちんばの偏った人間性の持主となってしまうのではないのでしょうか。私達は、言語を、科学を識るのはより重要との答を押つけられているのではない。人生とは短きものだといって、ビジネスに、思索に、喜びばしきことに時間を使うことのないとき、人生は—そう短いものになってしまうのだ。といっても、学者は自分たちの住んでいる世界の諸法則や特性に無頓着であってもよいほど、あるいは、科学者は詩的感情や芸術的素養がなくてもよいというほど、われわれの現実がせっぱつまったもでもない。」⁽¹⁶⁾ この指摘のようにMillは科学的法則性を学ぶことと心情を培うものとしての古典の学習を等しく位置づけてはいる。S.Collini⁽¹⁷⁾によれば、「唯一の、私がカリキュラムに与えんとする言語、文学はギリシア語、ラテン語であり、現今においてもそれらの学科をカリキュラムのなかに保持しておくのが得策である。」古典といっても文献学や考証の如きものではなくて、ギリシアの歴史、哲学を中心とする伝統としての古典の素養が考えられていたようである。要するに、彼は当時の古典礼賛としてのS.Mill、他方、科学を重要視したHuxleyを対比させているのも興味ある指摘である。以上、S.Millが時代的背景のなかで、実利や快楽を認めながら、愛他の理想主義的的道德観を説いたことも時代の要請するS.Millの折衷案であったこと、また、それに答えるべく現実の繁栄と倫理性に反応可能な気質をS.Millが持っていたのも事実であろう。以上は、当時の風潮、教育趨勢を寸見しながら、Millの矛盾点をというよりは、その思想の豊穡性をさぐらんとしたのである。

(II)

グイクトリア期が実益と繁栄を求める産業至上主義の時代であり、そのなかでS.Millたちは道德感覚のたてなおしを説いたといえよう。現代の日本はどうであろうか。GNPが高度に高く発展し、「金持ち日本国」になったが故に自分を見なおすべき時ではないかと人は云う。「もうけ、モノを買うことという、持つことだけに表現できる豊かさではなく、持つことが、人間と人間のかかわりを豊かにし、人間と自然とのかかわりを豊かにできるような豊かさを、私たちは、どのようにして創り出していったらいいのかを、真剣に考え実現していきたいと思う。」⁽¹⁸⁾ これはきびしい批判として、よりよい発展と内実を願えばこそその期待である。現代の日本が、Utilityをおい求め繁栄らしきものを手にしたのをMillならどうみるであろう。

社会が発展し、よりよくベターなものにむかうのは人類の歴史の必然であろう。それは、広く、幸福のパラダイムを求めての戦いといってよい。戦争が、災害が、疫病が社会をむしばんでは次の社会を生み、人は生きることを諾諾として追い求めてきた。その意味では「最大多数の最大幸福」こそが歴史のサンクションではないか。

日本の教育で道德教育が叫ばれて35年になるがどうであろうか。学校の道德教育は当初の「道德」の時間と較べて可成、定着してはきた、その社会的要請はますます高まるばかりといえよう。高度成長期の矛盾、青少年の非行、国際間の不信、軍国主義化への怪訝……である。そこで、青少年への道德教育こそ真剣にとりくむべき問題であることはいうに及ばないし、日本の繁栄が続けば続くほど、ますます道德教育のはたす役割が大きなものとなろうとその方向を凝視せざるをえないのである。ここで、平成元年告示の新しい学習指導要領をみると、第3章道德の目標は次の如くである。①人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念、②主体性のある日本人を育成し、③道德的心情を豊かにし、道德的判断力を高め、道德的実践意欲と態度の向上を図る、とあり、以上は小・中学とも共通の主目的を構成している。①の人間尊重の精神とは民主社会においては自己の人格とともに相手の人格(他の人々の人格)を尊重することで、相互信頼の人間愛といってよい。さらに、生命に対する畏敬とは自他の概念を延長、深化していきつくものである。それは、動植物の生命を無視しえない心であり、自然破壊のもの

を問題としてとりあげてやまない心である。③は道徳心への分析である。道徳的心情と道徳判断、さらに実践意欲の三つが指摘されるのであるが、今回とくに、道徳心情が第一にだされたのは心情重視のあらわれといえてよいであろう。

さらに、その内容をみてみよう。まず、4つの柱ともいえる分野が示される。

- 第1 自分自身にかかわること
- 第2 他の人とのかかわりに関すること
- 第3 自然や崇高なものとの係わりに関すること
- 第4 集団や社会とのかかわりに関すること

以上の4つの領域はさらに細分化されるわけである。

第1は、自分自身つまり望ましい生活習慣、心身の健康であり……

第2は礼儀、人間愛、友情……

第3は自然への愛、崇高さへの畏敬……

第4は集団、法、正義、家族、地域社会……

上記の文部省の説く道徳教育概念とS.MillのUtilitarianism理念とはその内容において大差はない社会理念といってもよいであろう。いや、Millの論述以上に細緻にわたるものが日本の指導要領かも知れない。「温かい人間愛を深め他の人々に対し感謝と思いやりの心をもつようにする」などが、日本中のすべての中学生に対する教育の内容として明記されているのをMillが知ったなら、日本の教育水準の高さ(?)に切齒扼腕したかも知れない。

理想主義者MillのいうUtilityの目標と内容と日本の道徳教育の目標と内容は個人と社会の実益を求めて重なりあうものといえるのであるが、大きく逸脱しているのは「自然に関する内容」である。

これは、S.Millにとって、自然概念は、また、自然への対決はいまだ必要とされないものであるためか、もともと彼の思考には「自然」は本性上、一顧だにされない従属物にすぎないのか。

日本の現今の指導要領では自然は積極的にとりあげられている重要概念である。「自然を愛し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めるようにする」という文部省の指導要請は、現在の破壊された地球環境のなかで、対決がせまられている状況を如実に示すものである。同時に、道徳と自然の関連的思考が強いられている必然性をそこに暗示するものである。

S.Millは道徳の指標やら根拠sanctionを「感情のもつ傾向」に求めたのであった。われわれの「好き嫌い傾向」を事実として求めること。このMillの考えはわれわれの日常の常識性の次元とも符合するものであった。Millはいう。「いうまでもないが、道徳的義務感に先験的事実、事物そのものの次元での客観的実在性をみる人たちは、それらが、まったく主観的で人間の意識にのみ由来すると信じる人々より道徳家らしく思われたりする。しかし、道徳の本体論がなんであろうと、人をして実際に動かすものは、自分自身の主観的感情であり、それは強度をもって示されている。…略…公平に考えて、sanction(道徳を成立せしめているもの)は精神そのもののなかにあるのだ。」⁽¹⁹⁾ この彼の道徳感情論を基体とする功利論は現代のわれわれの社会にも、現実という高揚された説得力を持つものであったと著者は考える。すなわち、自他の人間関係を、社会を導くものとして、充分、それは説得力をもつものであり、道徳教育論として考えるのなら、彼のsanctionをそのまま認めるのが至当であろう。

同時に、日本のわれわれの道徳教育には「自然概念」が大きくとりあげられているのは上記のとおりである。

S.Millに道徳の次元での自然概念へのアプローチがまったくみられないのはどういうことかと、われわれはいぶかるのである。逆に、日本の道徳教育で自然への態度、心情が無視され得ない大きな比重を示すのはなにを意味するのか。これは、小生への課題である。この小論における問題点をまとめてみれば次のごとくならう。

- ① S.Mill自身の研究を重ねること、H.Sidgwinや、J.Aastinを繙きながら、その功利主義の経緯をたどり、豊かな現実的社会規範の可能性をさぐる。
- ② 上記、Utilitarianismにみられない自然概念を道徳への構成要因として取りあげねばならないのではないかということ。つまり、自然を無視しては人間存在は、もはや、ありえない時期に直面していることもさることながら、道徳のsanctionそのものがわれわれの「感情の傾向性」にあること。さらには、道徳のsanctionは「自然概念」をどう取扱うかによって、より強固なものとなること。
- ③ 自然へのアプローチは、Herbest Read(1893~1963)やR.W.Emerson(1803~1882)を検べることによって一そう豊かな発展と解決が得られるのではないか。

以上、本論の考察は次稿にその論及を俟たねばならない。

(註)

- (1) Bentham, Introduction to the principles of morals and legislation" 1789 ch.I. §IX.
- (2) Ibid. chIII.
- (3) J.S.Mill, "Utilitarianism" Fontana Press, 1861(1990), P.259
- (4) Ibid, P.259
- (5) Sorley, "A History of English Philosophy" Cambridge Press, 1951, P258
- (6) John Skorupski, "John Stuart Mill" Routledge 1989, P.283~4
- (7) J.S.Mill "Utilitarianism" P.263
- (8) Ibid. P.268
- (9) R.J.Halliday, "John Stuart Mill" Allen & Unwin, 1976, P.44
- (10) J.S.Mill, "Mill on Bentham and Coleridge" Chatto & Windi P.39
- (11) J.S.Mill "Utilitarianism" P.281
- (12) Trevelyan "English Soeial History" Penguin (1986) P.264
- (13) Ibid. ch.18参照
- (14) M.J.Wiener "English Culture and the decline of the Industrial Spirit" ch.2
- (15) J.S.Mill "Esay on Equality law and Education" vol.xxi Routledge & Kegan Paul 1984 P.220~221
- (17) Ibid, P. iii
- (18) 暉峻淑子 「豊かさとは何か」 岩波, P.243
J.S.Mill, Utilitarianism" P.282